

に足らず一日の出炭量全山にて一萬斤に充たず重に東方小哈拉道口小河沿方面の供給とす、時に馱子にて赤峯に來るもの有り、又石炭の價格西密に同じ。

結論 赤峰市のみに付考察するに附近の薪材は漸次減少し

現在にては殆ど絶無の状態なるを以て勢ひ石炭の需要を擴大するに至るが目下日本人經營滿蒙興業株式會社支店工場の一箇所にして一年裕に五百萬斤を消費し燒鍋磨房各商店客棧より住家軍隊及び各官衙に至る迄の需要高は年と共に増加し大約四五千萬斤を要するに至る、尙近時電燈公司も計策中の事として石炭は益重視せらるゝ現狀に於て他より供給する者は誠に僅少にして錦元密のみ獨り衆望を負ふに至れり。以上の次第にて限りある能力を以て限りなき需要を充さんとし勢ひ其間に多大の不順調を來し炭價は錦元局の獨占に據り激昂し延て買手は地下無限の豊庫を目前に視つ、騰貴と品薄の脅威を受けざる可らず、此際此獨專的値上の舊套を脱し新規の方法に據り共益の路を講ぜんとするには必然の次第にして二三の有志家は他に炭礦の開辨を畫し、或は舊を扶け規模を大にすべしと云ふものあれども、只机上の空論に終り何等積極的方法に出づるものなし、要するに新礦を開採するも舊を擴張するも好しとし、要は此新時機に於て舊套を脱して時代の推移に伴ふ新式方法を執るに在り、即ち資本を大にして動力を蒸氣に移し諸工作を機械に借ると共に運搬方法を改良せば小さき勞働問題も石炭の逼迫も價格の高騰も一時に解決するを得べく以て豊富と低廉なるものを得れば一般の共益を増すこと大なるのみならず據て以て新工業の擡頭を促すこと諒然たるべし、即ち地方有志の舊來の頑迷を打破し新文化の恩惠に浴

せしむることを焦眉の急とす。

◎第二回内蒙古にて發見せる

鐵塊に就て

青地 乙 治

本鐵塊は大正五年内蒙古巴林旗、老大坂東南約十支里、砂丘にて蒙古産業公司薄守次氏の發見せるものにして大正三年の舊六月落下せるものなりと云ふ。右鐵塊につき調査せる結果を記すれば次の如し。

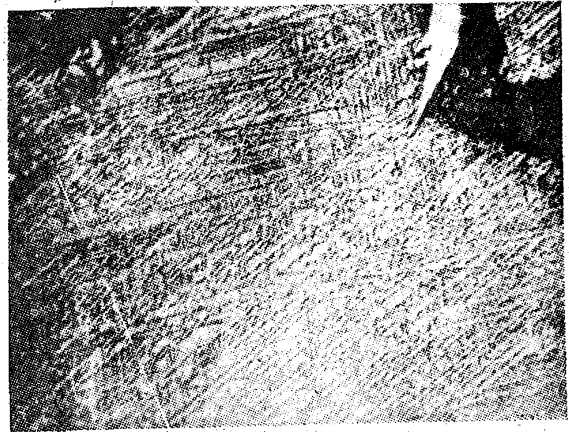
- 一、形状(第一圖)
- 長さ 二〇糎 幅 一八糎 高さ 一〇糎餘
- 二、重量 一八砵



- 三、比重七・三一六八
- 四、分析

鐵
 九四・八九三八
 ニッケル
 三・八二七六
 燐
 〇・八一六七
 コバルト
 〇・二七二九
 本鐵塊は表面著しく風化して赤褐色をなし、稀れに

第二圖



不完全なる凹みありて會て溶融せるが如き觀を呈する處あり、結晶質組織をなし劈開著しく内部は新鮮なる錫白色を呈し延展し易く性柔軟なり、研磨面を稀硝酸にて數秒間腐蝕せば第二圖の如き形象を顯はす。

性質を總合して考査するときは其產地と相待つて天隕鐵として鑑定することを得べし。

参考の爲め從來本邦に於て保存せられたる隕鐵の性質と今回發見せしものとを比較せば次表の如し。

重量	貫	貫	貫	貫
四・一〇〇	一八・三三	六・〇三	四・八〇〇	一・二六三
七・六〇〇	七・八九	七・八五	七・三六	七・六六〇
七・三三	一〇・〇九	九・三三〇	九・八九三	九・八五〇
八・六六〇	一七・九〇	五・九〇	三・八二七	四・四四〇
〇・四三三	〇・一三〇	—	〇・八三	〇・三三〇
〇・六三三	一・三三〇	〇・一〇〇	〇・一三	〇・〇五〇
痕跡	痕跡	—	—	痕跡
〇・一三	—	—	—	—

帝室博物館 満鐵地質調査所 榎本子爵 今回蒙古に發見せる鐵塊 京都大學所藏 館所藏品 查所々々藏 邸内所藏 見せる鐵塊

猶本隕鐵中に含有せる稀金屬及び分類上の位置につきては

披 萃 第二回内蒙古にて發見せる鐵塊に就て

他日改めて精査する所あるべし。

(大正十三年三月)

◎印度支那の鐵鑛

(遠東時報一九二三年十月號、印度支那政府の手にて記述せられたる者)

東京 東京には鐵鑛豊富なりと雖も今日まで製鐵業を營みたる者は其の規模小にして且つ土人の經營なりしたため其の埋藏に關しては詳細の事情不明なり、然れども製鐵業經營の計畫に付きては赤鐵鑛及び磁鐵鑛を非常に豊富に埋藏する者と看らるるタイ、ヌエン (Thai-Nguyen) 即ち (Nolin ham, Monna Inong, Chuan, etc.) の隣境に於て企圖せられ居る處なるが其位置の關係上西洋の冶金家は夫に之を注目し居れり。東京に於ける製鐵工業は一見非常に有望なるの觀あり。

一九一九年海防に於ては十五噸の小鑛鑪を築造し無烟炭と木炭の混合燃料は骸炭を用ゐて土地產出の鑛石の溶解に着手したるも銑鐵數百噸產出の結果は生産費高價に失するの理由を以て一九二一年其の製鐵を停止せり、右の如き結果に終りたるは畢竟其規模小なりしに基因するものにして製鐵業の如きは規模を大にし且つ製鐵専門技術者によりて之れを爲されざるべからざる事明かなればなり、然れども今日は已に右問題を再提せざるべからざる時期となれり。

頃日三角洲の北端に沿うて開鑿せらるる運河はタイ、ヌエンの下方ソン、チャオ (Song-Chao) とフラン、ツワン (Phu-Lang-Thoung) 附近のソン、ツワン (Song-Thoung) との間の交通に資しタイ、ヌエン迄二百五十噸積の荷船を通じ得べく斯くして此の低廉なる鑛產地と海防との水路を開くと同時に